

イザヤ書53.5

コリントの信徒への手紙二5.16-21

今読まれました、このコリントの信徒への手紙二第5章16-21節には、私どもの心に残る、とても印象深い御言葉が記されていたと思います。それは例えば、17節の御言葉です。「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」。この御言葉を、口語訳聖書の言葉で覚えておられる方も多いのではないのでしょうか。「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」。なんと恵みに満ちた力強い御言葉でしょうか。一度聴いたら忘れられない、そのようなインパクトがあると思います。特に、終わりの方で言われている「見よ、すべてが新しくなった」という御言葉が私どもの心を強く打つのではないのでしょうか。それは、私どもが〈新しくなる〉ことに憧れの思いを抱いているからではないかと思えます。今までの自分とは違う、生まれ変わった新しい自分になりたい、そのような願いを、私どもはそれぞれに、心に抱いているものなのだと思います。

ただしかし、この17節を含む、今日の御言葉全体で語られていることの主題は、明らかに〈神との和解〉なのです。それは、18節以下で、何度も「和解」という言葉が出てきたことで、すでにおわかりのことだろうと思います。「神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。」この手紙を書いた使徒パウロは、ここで何度も神が私どもとの間に和解を成立させてくださった、ということ語りながら、続く20節で、「キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい」と語って、この〈神との和解〉が、イエス・キリストご自身の切なる願いでもあることを告げているのです。つまり、神さまは、私どもと和解したがっておられる、ということなのです。これが、主なる神の、私どもに対する願いなのです。そのことが、ここでは集中的に語られているのです。

ところが、どうでしょうか。私どもの方では、神さまが願っておられるほど、神さまと和解したいと切に求めているのでしょうか。先ほど、〈新しくなりたい〉という思いを私どもは抱き、そのことに憧れの思いを抱いている、ということ申しましたが、その思いと同じように、神さまとの和解を追い求めているのでしょうか。

相手が人間の場合、私どもはその相手が大切な人であればあるほど、もしその人と不仲になり、関係が悪くなってしまったら、なんとかその関係を取り戻そう、仲直りしようと努めるに違いありません。例えば、夫婦の間のことを考えてみてもいいかもしれません。普段は仲良くしている夫婦でも、ついうっかり、心のない言葉を口にしてしまったがために、相手の心を損ねてしまって、口も利いてもらえなくなる。そういう日が何日も続く、ということがあると思います。そうなる、と、なんとかこの壊れた関係を元に戻さねば、と心から願うようになるのではないのでしょうか。家庭の空気が重苦しくなって、そうならざるを得なくなる、ということもあると思います。それだけに、その悪くなってしまった関係が回復されて、元の平和な状態に戻った時には、心から〈よかった〉、と思えるものがあります。

このように、相手が顔の見える人間であるときには、関係が悪化した相手との和解を切望するものですが、相手が目に見えない神さまの場合は、神さまとの関係が決裂してしまっていることすら、気が付きもしないのではないのでしょうか。それは、神さまが、とても忍耐強いお方だからです。例えば、神さまが、私どものように、敵対関係にある相手に対してそうするように、怒りをぶつけて来られたらどうでしょうか。私どもが神さまに対して罪を犯すたびに、罰をお与えになったら、どうでしょうか。すぐに神さまに赦しを乞い、怒りを鎮めていただく努力をするはずではないのでしょうか。しかし、実際、主なる神は愛の忍耐をもって私どもの罪を忍び、私どもの離反に耐えておられるので、そのような怒りを落とすこともなく、罰を与えることもなさらないのです。19節に、「**人々の罪の責任を問うことなく**」と書いてあるとおりです。罪の責任を一つ一つ数え上げて、私どもを責め立てる、というようなことはなさらないのです。だから、私どもは、神さまとの和解を必死に願い求めることをせず、あたかも神さまとの間に何の問題もないかのように勘違いしている者なのではないかと言わざるを得ません。

しかし、実際には全くそうではないのです。私どもは、息をつくたびに、神さまに対して罪を犯してしまう者だからです。うっかりした失言どころではなく、何をするにも御心に背いて生きてしまうのが、私どもなのです。だから、その関係は、とっくの昔に破綻してしまっているのです。それにもかかわらず、神さまと和解しなければ、と思わないのは、私どもが毎日突き合わせる人間の顔ほどには、神さまのみ顔を仰ぎ見ていないからなのではないのでしょうか。そのため、神さまとの間の気まずさも、息苦しさも、まして命の危険など微塵も感じられず、ただ呑気に生きているだけなのであります。

しかし、こんな私どもでも、神さまのことを意識し、ほんのわずかだとしても、神さまに対して畏れを感じざるを得ない時があります。それは、神さまに祈る時です。その時は、一対一で、神さまにお会いしなければならないからです。それまでは、神さまの御顔を避けて生きているような者でも、祈る時は、御前に出てゆかなければならないからです。その時、罪人である私どもは、神さまに対する「畏れ」（11節）を抱きつつ、御前におずおずと出て行かざるを得ないので。少なくとも、わたくしの経験からしますと、神さまと一対一になる〈祈り〉の特殊な状況は、他では味わうことのないような緊張感を強いられ、近づきたい畏れを抱かせられる場であるのです。

しかし、それでもなお、神さまに祈ることができる、御前に近づくことができるのは、神の憐みにより、そのことが許されているからのだと言わざるを得ません。いや、むしろ、そのことを、主ご自身が望んでおられるからに他なりません。先ほども少し触れましたが、パウロはここで、「キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい」と語っているのです。つまり、私どもが神のみ前に出て、神との交わりを回復することを、神ご自身が望んでおられ、そのことを私どもに求めておられるのです。そのための「和解」を、神自らが成し遂げられた、というのが、今日の御言葉なのです。

では、どのようにして、神さまは、私どもとの和解を成し遂げられたのでしょうか。

「和解」、というのは、何の代償もなく成立するようなものではありません。それまでは敵対関係にあったもの、関係が破綻していたもの、争い合っていたもの同士が、仲直りする、ということです。手を結ぶ、ということです。平和な関係に回復するということです。しかし、これがいかに困難なことであるかは、ウクライナとロシアの関係を見ればよくわかることではないかと思えます。この関係が回復され、和解に至るためには、それ相当の条件が必要なのです。あるいは、代償を必要とするのです。そして、通常の場合、その代償を払うのは、関係を壊した方でありましょう。あるいは、過ちを犯してしまった方があります。例えば、先ほどの夫婦喧嘩の場合など、失敗をして相手の気持ちを損ねてしまった方が、その見返りに、何かおいしいものを食べに連れて行ったり、好きなものを買ってあげたりして、その埋め合わせをする、ということをするのではないかと思えます。そうやって、罪を赦してもらって、和解が成立するのです。つまり、過ちを犯した者が差し出す代償と引き換えに、和解が成立するのです。いわば交換条件です。実は、この「和解する」と訳されているもともとの言葉の意味は、〈交換する〉という言葉なのです。犯した罪、過ちと、それに見合う代償とが交換されて、和解が成立する、という考えがここにはあるのだと思えます。

ところが、神さまとの和解が成立した背景には、今申し上げたことが、完全にひっくり返ってしまっているのです。そのことを、パウロは 21 節で、このように語っております。「罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです」と。つまり、私どもと和解するために、私どもが支払わなければならなかった罪の代償を、神ご自身が、御子の命をもって支払ってくださり、その代わりに、御子が勝ち取って下さった「神の義」を、私どもに与えて、罪なし、としてくださった、ということです。罪深い私どもと、義なるキリストとが交換されて、それで〈和解成立〉、としてくださったのです。こんな理不尽なことが世の中にあるでしょうか。こんな不条理な交換条件が未だかつてあったでしょうか。あり得ない出来事です。しかし、事実主イエス・キリストにおいて、この和解は、すでに成立されたのです。「これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ」と言われている通り、これは、すべて神が成し遂げて下さった愛の業なのです。こうでもしないと、私どもとの間に、いつまで経っても和解が起こらない、和平を結ぶことが出来ない、交わりを回復できない、だから、神さまご自身が、和解のための代償を支払ってくださったのです。言い換えると、それほどまで、神さまは、私どもを愛しておられる、ということなのです。関係を回復させたい、と願っておられる、ということなのです。

そうであるならば、この神さまとの和解に応じる、というのが、人間のなすべき最低限の務めになるのではないのでしょうか。何もかもお膳立てしていただいて、この和解の道が開かれて、契約書も用意されて、あとはサインをすればいいという状況にあるのです。ところが、そうでありながら、そこにサインをしないどころか、その会見の席上にも現れない、というのが、今の世の中の現状なのです。だから、パウロは、この世が、その和解を受け入れるために、「和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました」とか、「和解の言葉をわたしたちにゆだねられた」とか、「神がわたしたちを通して勧めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています」と語り、自分がそのための使徒とされていることを語っているのです。

しかし、この「使者の務め」は、パウロにだけ与えられているものではないのです。すでにこの神との和解を受け入れ、「キリストと結ばれ」、「新しく創造された」私どもが、〈和解のための使者〉として世に遣わされていくのです。

先ほど、ご一緒に耳を傾けたイザヤ書第 53 章に、すでにこの和解を成し遂げて下った御子イエス・キリストの御業が預言されていました。「彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた」。この尊い代償があったからこそ、私どもは、もはや、なにもはばかることなく、大胆にみ前に進み出て、全く自由に神に祈ることが出来るようになったのです。

今日は、レント（受難節）の第一主日です。私どもとの和解のために、貴い命を与えて下さった御子イエス・キリストのご受難を深く覚えつつ、イースターまでの日々、悔い改めと感謝をもって歩んで参りたいと思います。